

第38回(社)日本口腔外科学会総会

・抄録集・

The 38th Annual Meeting of Japanese Society of
Oral and Maxillofacial Surgeons

President/Yasushi Ohashi

NIIGATA, JAPAN. October 21, 22 1993. HOTEL NIIGATA



会長 大橋 靖

新潟大学歯学部口腔外科学第2教室

鶴見大学歯学部第一口腔外科学教室

○渡辺孝夫、中尾泉、瀬戸隆一

Evaluation of sinus subantral augmentation in our department

First Department of Oral Maxillofacial Surgery, Tsurumi University, School of Dentistry.

○Takao Watanabe, Izumi Nakao, Kanichi Seto

上顎臼歯部は解剖学的な骨量の不足から人工歯根の植立に困難を来たすことが少なくない。この部の人工歯根植立のため上顎洞洞底部の骨造成を図る方法をsinus subantral augmentation (SSA)として総括されている。我々は平成2年5月以来2年6ヶ月の間に患者16人(男10人女6人、平均年齢50.8歳)18洞にSSA法を施行した。今回、これらの臨床経過をまとめ、本法の臨床的な問題点を検討したので報告する。

手術内容:全例骨造成術と人工歯根植立を併用した。洞へのアプローチは上顎側壁の開窓によるもの16洞、人工歯根床を通して行ったもの2洞。使用人工歯根はCorevent社製 screw vent implant(10mmLあるいは13mmL)、1洞の人工歯根の数は1本が11洞、2本が4洞、3本が3洞、総数28本、平均1.6本であった。人工歯根植立位置における骨量は平均6.0mm、洞粘膜挙上後の空隙への突出量は同5.5mm。骨補填材は使用しなかつたもの5洞、他は人凍結乾燥脱灰骨(Dembone™)、吸収性hydroxyapatite(OsteoGen™)、新鮮自家骨を単独あるいは併用した。以上の結果、本法は人工歯根植立の適応を拡げるものとして有用であるものの1)洞粘膜裂開への対応、2)骨補填材の役割と種類、3)術後の同粘膜の性状等についてさらなる知見を積む必要があると考えられた。

Quantex (9000?)